The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	脂質染色による悪性リンパ腫及び白血病の病理組織学的研究
Author(s)	岡田, 正直
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29116
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

氏名・(本籍)	岡田正直（おかだまさなお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 1148 号
学位授与の日付	昭和42年3月28日
学位授与の要件	医学研究科病理系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**脂質染色による悪性リンパ腫及び白血病の病理組織学的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 岡野 錦弥 (副査) 教授 宮地 徹 教授 芝 茂

論文内容の要旨

〔目　　的〕

悪性リンパ腫及び白血病の発生起原については多中心性発生説と単中心性発生説が仮定され得る。吾々は一応対立仮説として単中心性発生説の立場から人体剖検材料を再検討して来た。又腫瘍細胞に分裂増殖の過程にある陽性寿命と分裂後成熟死滅に至る陰性寿命の2種類を設定した。今回私は多数の剖検材料を用いてこの陰性寿命にある腫瘍細胞を細胞機能としての脂質蓄積と脂肪変性の両面から追求し白血病及び類縁疾患病巣の新旧の判断の資料を求めんとした以外に併せて之等腫瘍性格としてのズダン染色に対する態度を検討した。

〔方法及び材料〕

悪性リンパ腫及び白血病80例のホルマリン固定剖検材料につき各例の全身リンパ節及びリンパ組織の大きさを表現し又夫々のリンパ節相互間の癒合状態や固定後の割面の色調について肉眼的に観察し組織所見との対比を行なった。更にリンパ節のゼラチン包埋凍結切片或いはカーボワックス切片のズダンⅣ染色標本を作成し腫瘍細胞のズダン陽性例につき各種脂質染色及び PAS 染色を施して検討し之等とパラフィン切片 Hematoxylin-Eosin 染色標本の組織学的所見との比較を行なった。被検索リンパ節は深在リンパ節として気管側，縦隔洞，腸間膜，大動脈周囲リンパ節を，浅在リンパ節として頸部，腋窩，鎖骨窩，そけい，腸骨動脈周囲リンパ節である。尚その内リンパ節内腫瘍細胞にズダン陽性顆粒を認める症例ではそれ以外に肝，脾，腎，骨髄についても検索した。ズダン陽性顆粒についてはその顆粒の量及び形態から型分類を行ない一つのリンパ節内に於いてズダン陽性腫瘍細胞の全腫瘍細胞に対する比率を算定した。その他同時にその支持組織として増生している細網細胞乃至は元のリンパ節組織の細網細胞のズダン染色性についても観察検討した。対照としては非腫瘍症例リンパ節及び癌転移のあるリンパ節合計20例について検索しリンパ節内ズダン陽性物質の分布について観察を行

なった。

〔成績及び考按〕

（1） ズダン陽性症例は80例中ほぼ半数に認められ，ホジキン病（HD），細網肉腫（RS）及びリンパ肉腫（LS)・の悪性リンパ腫に陽性例が多く白血病には陽性例は少ない。又HDとRSのズダン陽性腫瘍細胞は生理的な喰細胞に類似している所見がある。特にRSのズダン強陽性例ではこの傾向が強くズダン染色の形態より系統的類脂質症様所見もあった。ズダン陽性LSとリンパ性白血病の腫瘍細胞は生理的なリンパ球系細胞が常にズダン陰性であるのと対照的である。骨髄性白血病細胞にも生理的顆粒のものと異なるズダン陽性物質を少数例に於いて認めた。従って悪性リンパ腫はズダン染色により陽性例と陰性例に類別され，特にRSとLSに於いてその差が顕著である。

（2） ズダン陽性悪性淋巴腫腫瘍細胞の比率は身体各部位によって差を示すものがあり，推測される原発巣に近い程その比率が高いものが数例あったが，この場合リンパ節以外の諸臓器に浸潤した腫瘍細胞や比較的新しいと思える増殖巣にズダン陽性が少ない事が認められた。

（3） 固定リンパ組織の肉眼的色調は種々であるが黄色調は脂肪の量と関係があり，主として壊死巣の遊離脂肪滴と周囲細網細胞乃至喰細胞内脂肪顆粒によるものである事を示した。その他LS リンパ性白血病及び骨髄性白血病例の腫瘤期リンパ節内には支持組織として増生した細網細胞がズダン陽性顆粒を含んで腫瘍組織内に散在し星空状の形態を示す形式のものもみられた。

〔総　　括〕

一）悪性リンパ腫及び白血病はズダン染色によってズダン陽性症例とズダン陰性症例に類別され，一般的にはLSとRSに於いて顕著である。

二）ズダン陽性腫瘍細胞の比率が推測される古い病巣に近い程高い症例が数例あり腫瘍組織の新旧と脂肪変性の関連性を示唆する。

三）腫瘍細胞の検索と並行して反応性間質組織の脂質染色の態度を類型化した。

論文の審査結果の要旨

剖検による悪性リンパ腫及び白血病組織の系統的な検索が加えられた。然も岡野教授の指導下に於て，悪性リンパ腫及び白血病組織の発生起原について，独自の腫瘍細胞寿命を想定し，それに沿って研究が行なわれたことが注目に値する。岡野が以前から唱えている腫瘍細胞の2つの過程は，分裂増殖してゆく陽性細胞寿命と，分裂後成熟死滅に至る陰性細胞寿命とである。岡田は，本検索によって，腫瘍細胞内脂肪顆粒には，これ等2つの細胞寿命と関連性のあることを指摘した。即ち，第1型として，陰性寿命細胞内に脂肪顆粒が認められる場合で，この型では，ズダン好性腫瘍細胞の分布が推測される旧い腫瘍組織に近い程多いことを観察しているが，こういう観点から観察研究された仕事は今迄にない。第2型として，陽性寿命細胞内に脂肪顆粒が認められる場合で，核分裂中の悪性リンパ腫細胞内に脂肪顆粒を認めており，今迄に殆んど報告されていない観察である。